

(4) 薬物使用者を対象にした聞き取り調査 —HIVと薬物依存との関連要因をさぐる—

研究分担者：生島 嗣（特定非営利活動法人ふれいす東京）

研究協力者：野坂 祐子（大阪教育大学学校危機メンタルサポートセンター）

岡本 学（大阪医療センター 医療相談室）

山口 正純（放送大学大学院）

中山 雅博（アパリクリニック／日本ダルク）

大槻 知子（特定非営利活動法人ふれいす東京）

肥田 明日香（医療法人アパリ・クリニック上野）

白野 倫徳（大阪市立総合医療センター 感染症センター）

研究要旨

薬物を使用しているHIV陽性者の割合は少なくないことが指摘されているが、HIV陽性者の薬物使用の開始状況やそれに関連する背景要因などは明らかにされていない。そこで、HIVと薬物使用を関連づける背景要因を検討し、今後の支援や予防啓発に役立てるための基礎資料を得ることを目的に、薬物使用の問題を有するHIV陽性者やその支援者へのインタビュー調査を行った。薬物使用経験を有し、現在は支援的な立場で当事者に関わっている10名を対象に、半構造化面接を実施し、「薬物使用者への支援現場において、セクシュアルマイノリティやHIV陽性者が可視化された過程」と「セクシュアルマイノリティやHIV陽性者の薬物使用に関する傾向と脆弱性」について検討した。結果、ゲイ男性を含むMSM（男性とセックスをする男性）の薬物使用の契機や状況において、ヘテロセクシュアル男性とは異なる特殊性があり、さらに差別や排除の存在により、セクシュアルマイノリティに限定したグループが必要とされた経緯が示された。また、MSMの場合、性的な場面で薬物が使われることが多く、出会いや恋愛のきっかけとなる商業施設（ハッテン場）や掲示板などの環境において同時に薬物へのアクセスが容易であるため、そうした場での性的な関係性が、薬物とセックスの関連を強めていることが示唆された。さらに、薬物使用の背景にはセクシュアリティによる社会的な疎外感や自己肯定感の低さ、虐待やいじめなどのトラウマなどがあることも考えられた。それにより、家庭内や学校での、対処スキルの向上の機会を逸していた。今後、HIV、薬物、セクシュアルマイノリティのそれぞれに対する支援機関が当事者を中心にしてつながり、連携していくことが求められる。

A 研究目的

薬物を使用しているHIV陽性者の割合は少なくないことが指摘されており（白野，2011）、HIV診療にあたる医療機関やHIV陽性者への支

援を行う民間団体等においても、薬物使用経験のあるHIV陽性者に関わる機会が増えている。HIV陽性者への包括的な生活支援を検討していくうえで、薬物使用の状況や影響等をふまえながら当事者のニーズを明らかにすることが欠か

せない。薬物使用によるHIV関連リスクの増加や、HIV陽性者のストレス対処としての薬物使用の問題、また抗HIV薬の服用と薬物の併用にともなう健康リスクの可能性、治療の継続中断など、薬物使用とHIV陽性者の健康維持にはさまざまな関連性があることが考えられる。しかし、HIV陽性者の薬物使用の開始状況やそれに関連する背景要因などは明らかにされておらず、HIVやセクシュアリティ等を考慮した薬物使用者への支援については十分に検討がなされていない。

そこで、本研究では、HIVと薬物使用を関連づける背景要因を検討し、今後の支援や予防啓発に役立てるための基礎資料を得ることを目的に、薬物使用の問題を有するHIV陽性者やその支援者へのインタビュー調査を行った。

B 研究方法

1. 調査協力者の選定

研究の対象者は、薬物使用経験のあるHIV陽性者と、薬物使用経験を有し、現在は支援的な立場で当事者に関わっている人とした。

研究協力者の募集にあたっては、NPO法人ぶれいす東京の支援資源ネットワークを通じて、関係性が構築された他の支援者・組織等からの紹介を得た。また、調査参加による薬物の再使用を防ぐために、過去1年間、薬物使用経験がなく、インタビューにより精神的な不調をきたさない見込みがあること、また、協力者が薬物使用が過去半年間ない場合には、さらにHIV陽性者あるいは薬物使用者対象の社会的あるいは医療的支援とのつながりがあることを選定の条件とした。

2. インタビューの実施方法

個別での半構造化面接を実施した。事前に調査の目的や誓約事項等について書面を以て説明し、同意が得られた方からは同意書への署名を

得た。インタビュー前に、これまでの薬物使用の状況や受けた治療や支援、支援経験、薬物の最終使用年月等に関するフェースシートへの記入を依頼した。

調査時間は約90分から120分であり、調査者はHIV陽性者への支援実践を有する研究者2名であった。インタビューへの回答は録音し、逐語化されたものを分析した。

調査期間は、2012年10月に開始し、現在継続中であり、2013年12月に終了予定である。

3. 主な質問項目

調査協力者自身と他の薬物使用者について、主に以下の項目についての聞き取りを行った。

- 薬物使用の状況
(対象者の使用に至ったきっかけとその後の経過、生活面やHIV診療等への影響等)
- HIV陽性と薬物使用の関連性
(どちらが先であることが多いか、HIV陽性と薬物使用にはどのような関連があるか等)
- 薬物に関する支援
(どのような支援があるか、支援につながるきっかけ、回復への変化等)
- セクシュアルマイノリティとの関連
(薬物使用への影響や関連性、精神健康との関連性等)

4. 分析方法

逐語化されたインタビュー記録は修正版グラウンデッドセオリー法を用いて分析する予定であるが、現在、データ収集中であるため、本稿では10名の語りの概要をまとめ、キーワードとなる内容を<>で表記した。

5. 倫理的配慮

調査実施に関しては、NPO法人ぶれいす東京倫理委員会にて審査を受けた。調査協力者の健康への配慮と個人情報の守秘を誓約した。

C 結果

1. 調査実施状況

薬物使用経験を有し、現在、支援的な立場にある10名へのインタビュー調査を実施した。

2. 分析 I 薬物使用者への支援現場において、セクシュアルマイノリティやHIV陽性者が可視化された過程

(1) 自助グループにおけるクローズド・ミーティングの立ち上げ

薬物使用の自助グループにおいて、セクシュアルマイノリティのためのミーティング等が立ち上げられるまでの過程が語られた。そのなかで、セクシュアルマイノリティ限定のグループのニーズについて、次のような背景要因が挙げられた。

- ヘテロセクシュアルの男性とは異なる、薬物使用のきっかけや使用状況がある。
- セクシュアルマイノリティの場合、薬物使用とセックスのつながりがより密接である。
- セクシュアリティへの偏見や排除のリスクがなく、安心して話せる場が必要である。

ヘテロセクシュアルの薬物使用者は、非行や暴力団等への所属から薬物使用に至る人もあり、それらの人とセクシュアルマイノリティの薬物使用契機と使用状況の「違い」が強調された。ヘテロセクシュアルの男性の場合、非行や暴力団といった男性同性同士の非性的なホモソーシャルな関係性のなかで薬物が使われやすいのに対して、セクシュアルマイノリティの男性は、男性同性間の性的な関係性において薬物が使用されることがほとんどである。「薬物使用における関係性の違い」というセクシュアルマイノリティの特殊性については、すべての情報提供者に言及されていた。

こうした「違い」があるうえに、ミーティン

グの場など薬物使用コミュニティのなかでは、セクシュアルマイノリティやHIV陽性者への「偏見や排除」が生じがちであることから、セクシュアルマイノリティやHIV陽性者はミーティングの場で安心して話すことができないという問題があった。

そこで、こうした状況を改善するために、いくつかのグループで、セクシュアルマイノリティ限定のミーティングの立ち上げが試みられた。「開かれた場」を原則とする自助グループの場においてクローズドの場を立ち上げることに對する矛盾を指摘する意見もあり、立ち上げには困難さも伴ったようだが、その困難さこそが立ち上げの原動力になったと述べた人もいた。薬物使用者のコミュニティのなかでセクシュアルマイノリティを自認する人たちの積極的な動きによって、クローズドのミーティングが立ち上げられた。また、それに先行して女性クローズドのミーティングが存在し、女性の薬物使用者の心情や立場に配慮した取り組みがなされていたことも参照されたようであった。

このような取り組みが、東京や大阪でスタートしている。特に東京では複数のクローズド・ミーティングが立ち上げられている。こうした動きにより、薬物使用者コミュニティのなかでセクシュアルマイノリティの存在が可視化されていった。東京を中心としたセクシュアルマイノリティの可視化により、地方の当事者支援施設のスタッフがクローズド・ミーティングの存在を知り、薬物使用の該当者に情報提供がなされていた事例も聞かれた。

(2) 入所型施設におけるHIV陽性者の受け入れ

薬物使用者の入所型施設では、HIV陽性者を受け入れ始めた当初は、スタッフもHIV/AIDSに関する知識や情報が乏しく、HIV陽性者を受け入れることで他の入所者への感染を危惧したという人もいた。そうしたなかで、スタッフがHIVについて学びながら、受け入れの可能性について検討していった。医師を招き勉強会を

行ったり、HIVの支援を行う民間団体のスタッフを講師に招いたりするなど、「医療機関や支援団体とのネットワーク」を構築したところもあった。

HIV陽性者を入所者として受け入れる過程においては、HIVへの偏見やHIV陽性者と生活を共にすることへの抵抗感を抱く入所者もあったが、HIV陽性者本人や他の入所者それぞれと話し合いをしながら、試行錯誤しつつ受け入れが進められた。複数の施設で、HIVに特化した対応をするのではなく、感染症全体の予防を徹底するという観点に移行し、現在、大きな問題がみられていない。

入所したHIV陽性者が、他の入所者に対してHIV陽性やセクシュアリティなどの個人情報のカミングアウトすることについては、当事者本人にまかせる姿勢が主であった。当事者のなかには、性急にすべてを開示しようとする人もいるが、いつどのように開示するかを当事者自身が決められるようにするための支援がなされていた。また、カミングアウトが行われた際には、聞く側への支援も同時に行われていた。

3. 分析Ⅱ セクシュアルマイノリティやHIV陽性者の薬物使用に関する傾向と脆弱性

(1) HIV感染と薬物使用の関連性

HIV感染と薬物使用との関連性や時期について、どちらが先であるかは個人差があるものの、薬物使用が先に始まり、その結果、HIV感染のリスクが高まるのではないかという意見が多く挙げられた。

HIV感染を契機に自暴自棄になるなど、HIVのスティグマが引き金になって薬物使用が始まる例もあるが、「薬物使用による性行動時の予防行動の低下」がHIV感染リスクを高めるとの見方が多かった。

とくに覚醒剤による予防行動への影響は強く、薬物使用の影響下で、長時間、複数とのコンドームを使わないセックスを行うことでHIVや他の性感染症への感染リスクが高まること

が示唆された。また、覚醒剤の使用に先立ち、ラッシュや5-MeO-DIPT（ゴメオ）などがセックスの際に併用として利用され、結果的には、ゲートウェイ・ドラッグとなり、ドラッグ全般への抵抗感が低下していたことが示唆された。

(2) ゲイ男性／MSMの薬物使用の特徴

上述の分析Ⅰで、「薬物使用における関係性の違い」が挙げられたように、ゲイ男性を含むMSMの薬物使用の契機のほとんどが男性同性間の性的場面であり、ヘテロセクシュアルの男性が非性的な契機で薬物使用を開始し、その後、異性との性的場面でも薬物を使用するようになるという流れとの差異が語られた。

ゲイ男性を含むMSMにとって、薬物にアクセスする機会は、クラブなどで音楽の快感を高めるといった動機の場合もあるが、性的な場面や関係性に存在することが多く、また、他の男性と「出会う」機会や場（ハッテン場やインターネット上のサイト等）は同時に、薬物が入手しやすい環境でもあることから、ヘテロセクシュアルの男性と比べて、「セックスと薬物のつながり」がより密接であるといえる。覚醒剤を使用することによる「性行動の亢進」によって、「セックスと薬物のつながり」がより強まることから両者の強い循環が生じやすい。薬物を使用しないとセックスができなくなるのではないかと不安を抱くようになる薬物使用者もみられる。

また、ヘテロセクシュアルの性的関係においては、一般的に男性が薬物やセックスにかかる金銭的負担を負うのに対して、ゲイ男性を含むMSMの場合、相手の男性が負担することもあるために、金銭的負担がなく薬物を入手できる場合も存在する。さらに、マイノリティとして社会から疎外されればされるほど、パートナーが限られていき、より狭いコミュニティで人間関係を築くことになるため、薬物使用者同士の関係が密になりやすい場合もある。

このような環境・関係的要因から、ゲイ男性

を含むMSMは薬物を入手しやすく、それが薬物使用からの回復過程の阻害要因ともなっているようであった。

(3) セクシュアルマイノリティやHIV陽性者の薬物使用における心理・社会的要因

ゲイ男性を含むMSMにおいて、環境・关系的要因は、薬物使用の機会を促進させる要因となりうるが、薬物を使用する個人にとってはどのような背景があるのだろうか。

薬物使用者にとっての「セックスの意味」としては、次のような内容が含まれていた。

- ゲイ男性を含むMSMにとって、セックスそのものが、自己のアイデンティティや存在を確認する行動となる。セックスは「自分は何者かを確認する」行為であるとともに、日常生活においてアイデンティティを問われ続ける状況を脱し、「自分が何者かを問われない」場でもある。同様に、薬物使用においても、お互いが何者であるか、セクシュアリティや国籍、年齢、収入や生育歴などが問われない場として機能する。
- ゲイ男性を含むMSMは、社会のなかで、セクシュアルマイノリティであるという「秘密」を抱えて生きていくと、その「秘密」を隠さずにいられる、ピアだと感じられる人間関係における場面では「安全」に感じられ、たとえ健康リスクを伴う行為であっても、セックスや薬物への急速な接近や、相手との早急な関係づくりをしやすい。

どちらも、セクシュアルマイノリティが社会のなかで常にアイデンティティが問われ、否定的な評価を下されやすいという「社会的圧力や排除とセックスのつながり」が示されている。

こうした社会的圧力や排除による「自己否定感や孤立感」が、リスクのある行動を促進させてしまうことは、ヘテロセクシュアルでも同様

であり、そうした共通点を有しながらも、根底にあるセクシュアリティにもとづくライフスタイルの差異により、疎外感を抱くこともある。

- 結婚して家庭を築くといった話を周囲の人間関係から聞くと、疎外感を抱き、「埋まらないもの」を埋めようとして薬物を使用してしまうことがある。
- セクシャルマイノリティであることの自己否定感や孤立感が高い場合、薬物使用やリスクのあるセックスといった「背徳行為」をすることによって、同じ行動を取る人間間のなかで強くつながりあえるという共同幻想を抱いたり、気軽な気持ちで薬物に接近したりする人もいる。
- 性的に魅力的な存在であることやセックスの相手を多く持つことで、自尊感情や自己肯定感を高めようとする。

さらに、より身近なコミュニティである家族がセクシュアルマイノリティである子どもを受け入れられないなど、「家族からの排除」によって家庭内の居場所を失い、薬物やリスクのあるセックスに移行をすることもある。

- 家庭での虐待や学校でのいじめなどによって居場所を失い、宿泊先や生活費を確保するために、10代前半からビジネスライクなセックスを行うなかで薬物使用の機会を持つ。
- セクシュアリティを隠しながら他者と関わったり、家族などの身近な他者から承認や肯定をされた経験が乏しかったりすることから、自己表出や人間関係、他者への健全な方法で頼るといったソーシャルスキルの獲得が不十分である。

こうした「家族からの排除」による生活基盤の不安定さやソーシャルスキルの脆弱性に加え、「社会的モデルの欠如」も関係性の不安定

さに影響を与えている。

- セクシュアルマイノリティにとって、恋愛やパートナーシップ、エイジングに関するライフコースのモデルが少ない。
- セクシュアルマイノリティである薬物使用者の状況や回復過程のストーリーが身近にない。

こうした家族や社会からの排除や回復モデルの欠如は、薬物使用に限らず「さまざまな依存傾向」を高める。薬物への依存のみならず、アルコールやセックス、買い物、ギャンブルへの依存も併存することが少なくない。

回復への過程においては、まず依存症は病気であると知り、同じ立場の仲間の話のなかで「かつての自分」に出会い、具体的な知恵を分かち合うことが役立つと考えられていた。しかし、セクシュアルマイノリティの薬物再使用（スリップ）の高さを懸念する意見もあり、セクシュアルマイノリティ、HIV、薬物使用のそれぞれへの支援者や支援機関が連携していく必要性も述べられた。

D 考察

薬物使用の経験を有し、現在、当事者へ支援的な立場で関わっている10名へのインタビューから、ゲイ男性を含むMSMを中心としたセクシュアルマイノリティやHIV陽性と薬物使用の関連性について検討した。

情報提供者の支援経験から、薬物使用者のコミュニティにおいて、セクシュアルマイノリティに限定されたミーティング等が立ち上げられた経緯が語られた。クローズドな場を必要とした背景として、とくにゲイ男性やMSMの薬物使用の契機や状況が、ヘテロセクシュアル男性とは異なるという特殊性と、差別や排除の存在が挙げられた。クローズドの場を立ち上げる

ことは「開かれた場」を前提とする自助グループにおいては、新たな葛藤を生む局面となったが、その結果、当事者コミュニティのなかでセクシュアルマイノリティが可視化されていった。

入所型施設におけるHIV陽性である入所者の受け入れ過程は、薬物使用者への支援に限らず、さまざまな福祉施設においても参考になると考えられる。職員がHIVに関する知識を持ち、感染症全般に対する予防策を講じることで、入所型施設においてもHIV陽性者を受け入れることが可能である。個人情報扱いについても、当事者のニーズに沿った支援をしながら、同時に聞く側にもサポートを提供しつつ、その自己決定を尊重することは、他の施設でも取り組めることであろう。

また、HIVと薬物使用の関連については、多くのケースで、ラッシュやゴメオなどの薬物がゲートウェイ・ドラッグとなり覚醒剤への使用に至り、薬物の影響下でリスクのあるセックスを行うことにより、HIV感染の可能性を高める可能性が示唆された。とくに、セクシュアルマイノリティである男性の薬物使用の特徴としては、性的な場面で薬物が使われることが多く聞かれ、薬物へのアクセスが容易なハッテン場やセックスを目的とした出会いの機会などが、人間関係を広げるために利用する経路と重なっていた。こうした環境・関係的要因も薬物とセックスとの関連性を強めていることが考えられた。

薬物使用者にとって、セックスはアイデンティティとも関連が強く、セクシュアルマイノリティに対する社会的圧力や排除のなかでアイデンティティ形成が不安定になることによって、安全でない性行動に至ることもある。現実社会での自己の存在や不安定さから逃避するために、リスクなセックスに埋没する傾向も示唆され、今後、セクシュアルマイノリティの薬物使用者への支援においては、こうした心理・社会的な背景への理解や環境改善への努力も必

要であると考えられた。

また、従来、HIV、薬物、セクシュアルマイノリティのそれぞれに対する当事者団体や支援機関では、対象者が重複しながら、情報や支援の方向性が十分に共有されていない。支援資源が増えるだけでなく、それぞれの資源が当事者を中心にしてつながり、連携していくことが求められる。

E 本研究の限界と今後の課題

本調査は現在継続中であるため、中間報告にとどまる。今後、調査協力者を増やすことで、より全般的な傾向や個人差等について分析していく。

調査方法による限界として、調査協力者の偏りは避けられず、本結果は薬物使用経験のあるHIV陽性者の全体像を示すものではない。また、あくまで調査協力者の主観的体験にもとづく内容であるため、その解釈に留意する必要がある。しかし、薬物使用者の回復支援に関わりながら、HIVやセクシュアリティの問題に向き合ってきた調査協力者の経験や意見は非常に貴重なものであり、医療や行政、コミュニティにおける支援のありようについて、その経過や現状の課題が得られた。

今後は、主に薬物からの回復に取り組むHIV陽性者を対象としたインタビュー調査を行い、背景要因や回復過程の個人差や多様性について検討していく予定である。

F 発表論文等

なし